

平成二十九年 度

国

語

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ゴリラには、オスが胸をたたいて相手を威嚇する「ドラミング」¹が知られていて、これが、ゴリラのこわさや強さを象徴するものだ、とかつては多くの人が思っていた。ぽくもその一人だ。でも、山極^(注)によると、それは相手への宣戦フコク^①などではなく、自分の存在をアピールしたり、好奇心を表現したりしながら、要するに、相手に対して自分は対等なのだ^②と訴える行動だという。それは人間で言えば、A プロ野球の試合で、審判の判定にフク^③な監督が、激しく（一見、ケンカのように）抗議するのに似ている、と。親子ゲンカにも、夫婦ゲンカにも、兄弟ゲンカにも、同じことが言えそうだ。

「遊び」²は類人猿^{るいじんえん}にとって、なくてはならないとても重要な要素だ。ゴリラも、人間も、親子がじゃれ合うようにして遊んで楽しむことがよくある。この一見単純な遊びの中には、体も大きくて強い者が自らの力をわざと抑制^{よくせい}することで、小さくて弱い者に自分を合わせる、という複雑な行動が含まれている。一方の小さくて弱い方は、「背伸び」するようにして、自分の力を引き上げることで、相手に合わせようとする。そうやって、力の差を減らし、互いを近づけ、バランスをよくすることで、遊びはより面白くなり、興奮が高まる。

この興奮は、どちらが勝つか、負けるかをめぐって競争するスポーツでのハラハラドキドキとはちがう。「強弱」を一度カッコの中に入れて、両者が歩み寄るようにして楽しむのだ。

勝ち負けのない世界でもうひとつ大事なのが、「分配」という行動だ。

B、ゴリラも人間も食物を分かち合うのだろう。山極の説明によると、それは飢えた仲間の生存のためというよりも、「互いのきずなを確認する、あるいは親睦^{しんぼく}を深める」といったコミュニケーションの方法として発達した。その意味で、「分配」は「遊び」と同様、「感情の快の領域を刺激^{しげき}した」³。平たく言えば、「気持ちよかった」³のだ。

競争して奪^{うば}いとったり、独り占め^{ひとりじめ}したりするのにも、一種の快樂はあるだろう。でも、ゴリラや人間は、それよりも、分かち合いたいという喜びの方を重視した、というわけだ。

また、分配という点で、人間はゴリラよりさらに大きく一步を踏み出したようだ。家族内の分配を、家族間へと広げ、コミュニティという分配のネットワークをつくり出す。

それにつれて、家族の中での対等な関係は、家族同士の対等な関係へと、発展する。そこでは、ほかの家族を攻撃^{こうげき}したり、支配

したりしない。つまり、勝ちも負けもない。それがコミュニティというものだ。

人間は、狩猟のための道具を武器として同じ人間に向けるようになり、武力で社会の秩序をつくりだしたという説がトナエられたこともあったが、ぼくは **C**、生存のためにコミュニケーション能力を高め、食べ物を分け合ったり、共同作業をした

りして対等な関係を築いてきたことこそが、人間としての進化に重要な役割を果たしたのだと思っている。

山極も、人間が、家族と共同体を両立させた唯一の動物だという点に注目している。そして、それこそが、人間ならではの特徴、つまり「人間らしさ」というものの核心ではないか、と。

「弱さ」という観点から考えてみよう。まず、人類史の大部分を占める狩猟サイエンス生活がどんなものだったかに思いをはせながら、そこでの「弱さ」としてどんなことがあったか、想像してみる。すると、人間の生存にとって不利になりそうな身体的な条件や制約のことが思い浮かぶだろう。幼い子ども、病人、けが人、老人。彼らの「弱さ」とは、だれもが人生のある時期に必ず、あるいはおそらく、経験することになる「弱さ」。また、さまざまな身体的な障がいという「弱さ」を抱える可能性は、今よりも多かったのではないか。身ごもってお腹の大きな女性、また乳児をもつ女性も、多くの制約をかう。その女性を一員とする家族や共同体もまた、その「弱さ」を共同で抱えることになる。同じように、上にあげたすべての制約は、単にその人個人のものではなく、同時に、家族やコミュニティ全体に深く関わるものだったはず。

では、こうした「弱さ」をどうするか。それは、単にその人だけの問題ではなく、家族、コミュニティ、そして社会全体の問題だ。

遊びも分配も高度なコミュニケーションも、みな、お互いが抱えている「弱さ」を補い合うことで、「弱さ」を「弱さ」のままにしておかないための方法だと言える。「弱さ」だったものや、「弱さ」でありえたことを、「弱さ」ではない「もの」や「こと」へと変えてしまうのだ。すると「弱さ」という言葉や概念が意味を失ってしまう。それが「勝ち負けのない社会」というものだろう。

遊びや分配が「弱さ」を無効にする方法だと言ったが、逆に、「弱さ」や「強さ」からなるデコボコがあったおかげで、それに対処するために、遊びや分配が発達し、人間は高度なコミュニケーションや共感の能力を得ることになった、とも言えるだろう。つまり、人間ならではの「強さ」とは、もとをたどれば、「弱さ」のおかげだった、というわけだ。

家族からコミュニティへと、独自の「勝ち負けのない社会」を発展させてきた人間が、しかし、いま、大きな危機に直面してい

る。山極はその危機を、「人間社会のサル化」と呼ぶ。⁴

現代社会は、個々人が競争して利益を得ることによって生きる場となりつつある、と山極は見ている。そうやって生きるのに、何かをだれかと分かち合う必要もないし、他人がどう思うかは自分に関係ないことなので、共感なんてする必要もない。「これはまさにサル社会にほかなりません」と彼は言うのだ。

自分の利益のために集団をつくる。すると一面では、個人の生活がたしかに効率的で自由になるように見える。しかしその一方で、「他人と気持ちを通じ合わせることはできなくなつて」しまふだろう、と。

序列で成り立つピラミッド型のサル社会は、「人を負かし自分は勝とうとする社会」だ。「そんな社会では、人間の平等意識は崩壊するでしょう」と山極。

ぼくたちは時に、家族や共同体のしがらみから解放されて、個人としての自由気ままな暮らしを楽しもう、という思いを抱くことがある。しかし、だ。

ここには見落とされているひとつの危険な事実があります。それは「人間がひとりで生きることには結びつかない」という事実です。家族を失い、個人になってしまったとたん、人間は上下関係をルールとするシステムの中に組み込まれやすくなつてしまふのです。

「弱さ」を補い合つたり、強弱のデコボコをならしたり、勝ち負けをなくしたりするために役立ってきた家族やコミュニティを失った時、再び、個々人の「弱さ」がむき出しになつてしまふ。そして裸^{はだか}のまま、強い者たちが支配する社会に放り出される。思えば、これこそが近代化と呼ばれる過程だったのだろう。そして今や、グローバル化によって、ぼくたちは、地域とか国とかという衣さえ脱ぎ捨て、バラバラ、自由な個人として、勝ち負けを競うグローバル・マーケット（世界規模の経済市場）に投げ出されようとしている。そこでの経済活動とその成果だけが、ぼくやきみが何者であるかを決めることになるだろう。

これは、どう見ても、サル化した人間社会の完成だ。そしてそれは、人間を人間にしてくれた進化の車輪を逆に回すことに他ならない、とぼくには思えるのだが……。

「人はパンのみにて生きるにあらず」という聖書の言葉をきみは知っているかな。ぼくたち人間はたしかに、いくら食物などの

物質的な豊かさに恵まれていても、ひとりでは生きていくことができない。家族やコミュニティを形成して生きる社会的な動物なのだ。

これを言い換えれば、そうしないと生きていけないくらい脆く、弱い存在だ、ということになる。でも、その「弱さ」にちゃんと向き合うことによって、ともに食べ、ともに住み、ともに生きることができるようになった。ともに認め合い、感じ合い、そして愛し合うことさえできるようになった。そういう方向へと進化することで、強弱、勝敗、優劣、上下といった二元論を超える力を得たのだ。そういう力の大本に、「弱さ」があった。そう考えれば、「弱さ」ってすばらしいじゃないか。

だから、やっぱり、弱虫でいいんだよ。

(注) 山極——山極壽一。霊長類学者。

(出典 辻信一『弱虫でいいんだよ』ちくまプリマー新書による)

問一 〰線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A A～Cに入る言葉として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜ ウ たとえば エ つまり オ むしろ

問三 〰線1「ドラミング」とはどのような意味を持った行動ですか。二十字以内で抜き出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問四 〰線2「遊び」とありますが、「遊び」をより面白くするためにどのような工夫がされていますか。四十字以内で説明しなさい。

問五 — 線3 「気持ちよかった」とありますが、「分配」が気持ちよかったのはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 周りに対して自分の力を誇示し、優越感にひたることができるから。
- イ 互いのきずなを確認したり親睦を深めたりすることが快感だったから。
- ウ 仲間の命を助けることで、役に立っているという充実感を得られるから。
- エ 食べ物を分け合ったり共同作業をしたりすることがうれしいから。
- オ 競争して奪いとったり独り占めしたりすることに喜びを感じるから。

問六 — 線4 「人間社会のサル化」とありますが、どうなることですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人間社会が、個々人が競争して他人に勝つことによって利益を得ようとする社会に変化すること。
- イ 人間社会から家族の絆が^{きずな}消え、ひとつの大きなコミュニティとしてボスのもとに組織化されること。
- ウ 人間社会が、生存に不利になりそうなことから目をそらし見ないふりをする社会に変化すること。
- エ 人間社会の家族意識が強まり、話し合いによって優劣を決定しコミュニティを作るようになること。
- オ 人間社会が、皆から選ばれたリーダーを中心にお互いを助け合い認めていく社会に変化すること。

問七 — 線5 「弱さ」ってすばらしいじゃないか」とありますが、そう言えるのはなぜですか。六十字以内で説明しなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小径を並んで歩きながら、昭子さんはまた含み笑いの顔になって、「ずっと、あなたにお礼を言いたかったの」と言った。「死んでからも約束を守ってくれてありがとうございます、って」

「……べつに、約束だからってわけじゃない」

「そう？」

からかうように返し、「昨日の朝、直樹に話すかと思った」と言う。

「なにを？」

「プロポーズの言葉」

「——いや、なんで、そんなの……言うわけないだろ」

「だって、ほら、あの子、毎朝ご飯を炊かなくてもいいなんて言ってたじゃない。まったくもう、なんにも知らないんだから」
徹夫さんと昭子さんの結婚は、必ずしも周囲のすべてのひとたちに賛成され、祝福されたわけではなかった。昭子さんと徹夫さんの学歴や収入の差を気にするひとが、まったくいなかった、と言えば嘘になってしまう。そんな二人が結婚を決めたときに、無口な徹夫さんが必死に搾り出したプロポーズの言葉は——。

「ねえ、覚えてる？」

昭子さんは徹夫さんの顔を横から覗き込んで訊いた。答えが返ってこないのは最初からわかっている。クスッと笑って、低い声色をつくって、言った。

俺、金持ちにはなれないけど、もしもおまえが学校の先生を辞めることになっても、絶対に仕事をがんばって、毎朝、炊きたての、ほっかほかの白い飯、食わせてやるから——。

嗚咽が聞こえる。

直樹さんが、いつの間にか、一緒にいた。

昭子さんを真ん中に、徹夫さんと直樹さん、時空たつまきが再会させてくれた家族三人は、小径を並んで歩く。

「なんで言ってくれなかったんだよ、親父^{おやじ}」

涙声で怒る。「そういうこと……²もつとたくさん教えてほしかったんだよ、ガキの頃^{ころ}から、ずっと」とハナを啜^{すす}って訴える。

「わざわざ教えるようなことじゃないだろ」

徹夫さんはぶつきらばうに言う^a。

「そんなことないよ、大事な話だよ。いまのを聞くのと聞かないのでは、親父^②の人柄^{じんがら}とか、おふくろとどんな夫婦だったのかとか、全然違ってくるんだから」

「どっちだっていい、そんなの」

「だって……」

「聞かなきゃわからないことなら、最初からわからなくていいんだ」

さらに昭子さんも、当然のように徹夫さんの味方についた。

「あんたのほうが、親の話、全然聞かなかったのよ。中学生や高校生の頃、ほんとに態度が悪かったんだから」

「みんなそうだよ、しょうがないでしょ、反抗^③期^きなんだから。子どもはそういう時期がないとダメなんだよ」

「で、大学に入れば落ち着くかと思ったら、すぐウチを出ちゃって」

にらまれた。高校生の頃は「あんたがいると狭苦しいから、さっさと一人暮らししなさい」と言っていたのに。

「昔の話だって、あんたが素直^④に聞く態度を見せてれば、お母さん、いくらでも話してあげたわよ。たくさんあったんだから、

あんたに言っておきたいこと」

「そんなの、いまさら言われたって……」

「そうよ、遅いのよ」

昭子さんはぴしゃりと言った。「親が死んでから親の話を聞こうと思ったって、もう遅いんだからね」

そのとおりだった。まったく、ほんとうに、そのとおりなのだ。目をまた赤く潤^{うる}ませた直樹さんは、それでも涙が頬^{ほお}を伝い落ちるのをグッとこらえて、笑った。

「なんか、ひさしぶりだなあ、おふくろに叱^{しか}られるのって。二十年ぶりぐらいじゃないかなあ」

「こっちはしょっちゅう怒ってるのよ、空の上から、あんた見てて」

「ほんと？」

直樹さんは半信半疑の横目で昭子さんを見る。「ほんとよ、まったくもう、ほんとに、いくつになっても……って」とぶつくさ言う昭子さんは、口をとがらせながらも目を合わせない。その様子からすると、やはり、いまのはさすがに嘘なのだろう。

でも、ほんとうだったらいいのにな——。

直樹さんは空を見上げて、フフツと笑う。

目がさらに赤く潤んでくる。

「杏奈ちゃん、今朝ウチに来て、面白いこと言ってたのよ。ねえ、お父さん」

「ああ、うん……そうだったな」

徹夫さんと一緒に『たんぼ団地の秘密』の原稿を探していた杏奈は、手が空いたときに「あ、そうだ、おばあちゃんにまだ挨拶してなかった」と仏壇に向かったのだ。

鈴を鳴らし、手を合わせて、「わたしね、ゆうべ、若かった頃のおばあちゃんを見たんだよ」と遺影に話しかけた。「おばあちゃんのこと、やっと少しずつわかってきて……どんどん好きになってるよ」

昭子さんは「かわいいこと言ってくれるでしょ？」とうれしそうに言う。

直樹さんは「あいつは、ああいうところを照れずに言葉にしちゃうタイプなんだよね」と苦笑する。「で、面白いことって、それ？」

「ううん、まだまだ、ここからが本番よ。ね、あなた、そうよね？」

「……ああ」

とにかく、まったくもって無口なのだ、徹夫さんというひとは。

「それでね、杏奈ちゃん、お供えがゆうべのままだったことに気づいてくれたのよ。おじいちゃんも、それでやっと、ああ、忘れてた、って」

いまからご飯を炊いたのでは時間がかってしまう。残ったお冷やのご飯を冷凍したものならあるのだが、それを電子レンジで解凍して温め直せばいい、というわけにはいかない。ほっかほかではあっても炊きたてではない。そこが徹夫さんにはひっかかる

のだ。

「しかし……親父も、ほんと、融通が利かないんだなあ……」

直樹さんはあきれて笑いながら、ふと、思う。親父、お父さん、おじいちゃん、あなた。徹夫さんは、いろいろな呼ばれ方をしている。

鉄工所では若い頃の「テツ」から、後輩が増えるにつれて「テツさん」に変わった。あらたまったときには「班長」だった。

いままでは特に気に留めることもなかったが、なんか、すごいな、とあらためて思う。家族をつくって、働いて、歳を取って生きていくことは、すごいんだな。

³ 鼻の奥がツンとしたので、「で、お供えはどうしたの？」と話を先に進めた。

「杏奈ちゃんがいいこと考えてくれたの」

お冷やご飯はダメだし、レンジでチンもダメなら――。

じゃあ、炒飯チャーハンにすれば――？

明るく、屈託なく言った。

「あと、わたしはケチャップご飯が好きだけど……ってね」

直樹さんは思わず噴き出した。徹夫さんも杏奈の言葉にしばらく啞然あぜんとしたあと、こらえきれなくなって笑ったのだという。声をあげ、おなかを抱えて、最後は目に涙まで浮かべて、笑いつづけたらしい。

「へえ、そんなに笑うお父さんって、見たことないなあ」

⁴ 意識して、「親父」ではなく「お父さん」をつかってみた。「ねえ、お母さん、そうだよ」と、昭子さんに対しても同じ。ひさしぶりだ。照れくさい。だが、悪くない気分だ。

両親の反応は、特になにもない。呼び方が変わったことに気づかなかったのか、気づかないふりをしてくれたのか、その答えは、昭子さんの一言でわかった。

「ナオくんが知らなかっただけよ。お父さん、意外とよく笑うのよ」

この呼ばれ方もひさしぶりだった。呼ぶよりも呼ばれるほうが、はるかに照れくさい。

「まあ、それで、杏奈ちゃんのおかげで、お父さんも肩の力が抜けて、結局レンジでチンのご飯をお供えしてくれたの。あの子、ほんとうにいい子だよね」

「うん……ありがとう」

生きているうちに、会わせたかった。杏奈を抱き上げてほしかった。杏奈に、いろいろな思い出を、たくさん話してやってほしかった。

昭子さんは、一度も「おばあちゃん」と呼ばれることなく亡くなった。早すぎた。やっぱり、どう考えても、早すぎた。黙り込んだ直樹さんに、昭子さんは言った。

「長生きできなくて、ごめんね」

頭を撫でるような声だった。自分より息子のほうが、ずっと背が高いのに。

徹夫さんは、おまえが悪いんじゃない、というふうにかぶりを振って、言った。

「一緒に住んでたのに、母さんの具合が悪いことに早く気づいてやれなくて……直樹、すまなかったな」

違うよ、お父さんが悪いんじゃない、お母さんが悪いのでもないんだよ――。

言葉にならない。うつむくと、目に溜まった涙のせいで足元が揺れていた。代わりに、うめき声を搾り出して訊いた。

「なんで……僕が考えてることが……お母さんの亡くなったことを悔やんでる、って……なんでわかったの？」

昭子さんは、あつさりと答えた。

「だって、親だもん」

まぶたがすうつと軽くなって、聞こえるはずのない、ぴちゃんつ、というしずくの音が、確かに聞こえた。

(出典 重松清『たんぽぽ団地』新潮社による)

問一 ①⑤の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二 a・bの語句の意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a ぶつきらぼうに

ア いらいらしながら
イ 無愛想に
ウ 本心をかくして
エ 悲しそうに
オ とまどいながら

b 屈託なく

ア 早口で
イ しずかに
ウ 上品に
エ はれやかに
オ 大きな声で

問三 線1「プロポーズの言葉」とありますが、その内容を示す一文を本文中から抜き出し、最初の五字を答えなさい。

(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問四 線2「もつとたくさん教えてほしかった」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 両親がどのように生きてきたかということ、素直に聞けずに後悔しているから。

イ 両親が結婚した状況を知ること、自分の人生へのヒントにできたはずだと思うから。

ウ 両親がどのように結婚に至ったかを知れば、父親の厳しさを理解できたはずだと思うから。

エ 両親の人生を知ることが、今後どのように両親に接するかを決める重要な要素だから。

オ 両親が結婚した経緯を聞くことで、二人のことをより深く理解できたはずだと思うから。

問五 線3「鼻の奥がツンとした」とありますが、このときの直樹さんの気持ちはどのようなのですか。六十五字以内で説明しなさい。

問六

——線4「意識して、『親父』ではなく、昭子さんに対しても同じ」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 杏奈の答えがあまりにも意外なものだったと徹夫さんが思い起こしているのを聞いて、自分も幼い頃にもっと遠慮なく両親にいろいろと聞けば良かったと、後悔を感じ始めていたから。

イ 杏奈の答えが面白かったという話を聞いているうちに恥ずかしくなってきた、今後は娘をきちんと教育していいように考えるようになり、そのためにも気持ちをきりかえる必要があったから。

ウ 杏奈の答えがあまりにも面白かったから徹夫さんがおなかを抱えて笑ったという話を聞いて、徹夫さんの意外な一面を見た思いがして、徹夫さんや昭子さんのことを身近に感じる事ができたから。

エ 杏奈の答えで徹夫さんの肩の力が抜けたという話を聞いているうちに、ずっと約束を守り続けた徹夫さんに尊敬の気持ちを抱くようになり、徹夫さんの偉大さが身にしみて感じられたから。

オ 杏奈の答えのユニークさに徹夫さんや昭子さんが大笑いしたという話を聞いて感動し、自分も娘のように無邪気に接すればよいのだと気づき、お父さんという呼び方に変えればよいと思えたから。

問七

——線5「目に溜まった涙のせいで足元が揺れていた」とありますが、このときの直樹さんの気持ちはどのようなものだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一度もおばあちゃんと呼ばれることがなかった昭子さん进行かわいそうに思って氣にしていたが、責任は誰にもないという両親の話を聞いてますます申し訳ない氣持ちが高まっている。

イ 杏奈に会っているいろいろなことをしてほしかったと後悔しているのに、さらに昭子さんが長生きできなかったことを謝ったことによつて一層後悔の氣持ちをつのらせている。

ウ 昭子さんが生きているうちに杏奈に会わせることができなくて悲しく思っている直樹さんに対して、責任を感じる必要はないと徹夫さんが言つてくれて感謝の氣持ちでいっぱいになっている。

エ 昭子さんが生きているうちに杏奈に会わせられなかったことを悔やんでいる直樹さんの氣持ちを見透かすように、両親が謝ったことによつて両親の深い愛情を実感している。

オ 杏奈が良い子だとほめてくれるので両親の愛情に感激していたが、昭子さんを救うことができなかったことを不意に思い出して自分の無力を悲しみ責任を感じている。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（出題の都合により、一部表記を変えた部分があります。）

（注1）

（気品が身につけている女官が一人）（釣殿のあたりに）

（身分の低い僧が集団

近ごろ、最勝光院に、梅盛りなる春、ゆゑづきたる女房一人、釣殿のわたりにたたずみて、花を見るほどに、男法師などうち

で入ってきたので

（優雅さがないと思ったのだろうか、外に出て帰った）

（来ている薄い衣が、ことのほか黄ばみ、汚れているのを）

むれて入り来ければ、こちなしとやおもひけん、帰り出でけるを、着たる薄衣の、ことのほかに黄ばみ、すすけたるをわらひて、

（花を見捨てて帰る猿さんよ）

花を見捨てて帰る猿丸

（すぐに）

（連歌を詠みかけたので）

と連歌をしかけたりければ、とりあへず、

（星を見る犬がほえるのに驚いて）

星守る犬の吠ゆるに驚きて

（と付けたのだった。）

（恥ずかしくなって逃げてしまった。）

と付けたりけり。人々はちて、逃げにけり。

（俊成卿の娘で）

（歌人であったのだが、とりわけ姿をみすばらしくしていたということである。）

この女房は俊成卿の女とて、いみじき歌よみなりけるが、深く姿をやつしたりけるとぞ。

（出典 『十訓抄』 による）

注1 最勝光院：南禅寺の境内にあった寺。

注2 連歌：和歌の上の句（五七五）と下の句（七七）を二人で詠み合って一首を完成させる遊び。

注3 俊成卿：藤原俊成。和歌の能手。

問一 〓線 a 「ゆゑづき」、b 「わらひ」、c 「はち」を現代仮名づかいによる表記に書き改めなさい。

問二 — 線1「帰り出でける」とありますが、なぜですか。最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 梅の花をこっそりと家に持ち帰ろうと思ったから。

イ このままここにいても意味がないと思ったから。

ウ 梅の花を十分に楽しんで思い残すことはないから。

エ 自分一人だけで梅の花を見ていても楽しくないから。

オ 人々が来て梅の花を楽しむ気分ではなくなったから。

問三 — 線2「猿丸」、3「犬」とありますが、それぞれ誰のことを指していますか。最も適當なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 男法師 イ 俊成卿

ウ 俊成卿の女 エ 作者

問四 — 線4「逃げにけり」とありますが、人々はなぜ逃げたのですか。最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相手が予想外に上手な句を詠み返してきてきまりが悪かったから。

イ 春にふさわしくない動物を句に入れるという失敗に気づいたから。

ウ 大勢の人の前で貧しい身なりをからかわれて深く傷付いたから。

エ 自分たちの行動が風流でないと指摘されたことにとまどったから。

オ 梅の花の美しさを上手に表現できなかったことがくやしかったから。

問五 — 線5「いみじき」の文中における意味として、最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 上品な

イ 無名の

ウ 年老いた

エ すばらしい

オ みすばらしい

問六 本文に込められた教訓として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 風流を楽しむには一人で心を落ち着けて対象と向き合うべきである。
- イ 和歌の教養があるからといってむやみに他人に自慢してはいけない。
- ウ 他人の言動を手本にして自分の行動を正しく改めるべきである。
- エ みすばらしいからといって外見だけで人を見下してはいけない。
- オ 人柄が悪いからといってその人の意見まで無視してはいけない。